

## ナスコナカイガラムシの土着天敵について



図1 ナスコナカイガラムシに産卵する  
*Anagyrus californicus*

図2 マミー化したナスコナカイガラムシ

表1 異なるステージのナスコナに寄生した *A. californicus* の発育期間

各パラメータ	寄生時のナスコナの発育ステージ			
	1齢幼虫	2齢幼虫	3齢幼虫	成虫
卵+幼虫期間 (日) ※1	13.20±0.27 a	10.40±0.27 c	10.56±0.41 b	11.52±0.60 a
マミー形成率 (%)	81.9	78.8	50.4	14.4
蛹期間 (日) ※2	12.50±0.27	12.40±0.27	12.39±0.41	12.72±0.60
羽化率 (%)	93.9	85.5	89.8	89.3

※1 異なる文字間で有意差あり (Steel-Dwass検定,  $p < 0.05$ )

※2 処理間で有意差なし (Kruskal-Wallis 検定,  $p > 0.05$ )

施設栽培のミョウガ、ナス、ピーマンなど、天敵中心のIPMが普及している作物は、コナカイガラムシ類による被害が問題となっています。有効な防除薬剤は天敵に対する影響が大きいものが多く、化学的防除法以外の技術の開発が求められています。防除効果の高い天敵は市販されていません。そこで、土着天敵を探索するため、県内の施設野菜栽培ほ場からコナカイガラムシ類を採取し調査した結果、安芸市の施設ピーマンほ場から採取したナスコナカイガラムシ(以下、ナスコナ)から寄生蜂が確認されました(図1、2)。本種は国内初記録であるトビコバチ科の*Anagyrus californicus*であり、香南市、南国市の施設ほ場でも発生が確認され、県内に広く分布している可能性が示唆されました。本種の生態を調べた

結果、ナスコナに産卵後、25℃条件では10～13日程度でナスコナを殺してマミーを形成して蛹になり、12日程度の蛹期間を経て羽化することが明らかになりました(表1)。また、マミーを形成した割合はナスコナの1齢幼虫に寄生した場合に81.9%と高く、成虫に寄生した場合には14.4%と低くなりましたが、ナスコナの1齢幼虫から成虫まで全ての発育ステージに寄生し、成虫まで発育可能であることが明らかになりました。

これらのことから、*A. californicus*はナスコナの生物的防除資材として有望であると考えられました。今後は本種の利用技術の開発に取り組んでいきます。

(昆虫担当 米津聡浩 TEL088-863-4915)